

平成26年12月26日の仕事納め式での市長あいさつです。

顔の見える関係をつくろう

毎日の窓口での対応や、行事などでの土日出勤などみなさんが頑張っている姿を見てきました。みなさん、1年間、大変お疲れさまでした。

さて、職員のみなさんには、市民の知り合いが何人いますか？ 窓口で知り合った人はたくさんいるかもしれませんが。でも、自分が困ったとき、何か知恵を借りたいとき、「〇〇さんのためだったら…」と言ってくれる市民の知り合いが、みなさんにはいますか？

今年、長野県白馬村で地震がありました。家が倒れたとき、中にいた人を助けてくれたのは近所の顔見知りの方でした。東北地方の首長に伺った話では、東日本大震災直後、「困っていることはないか？」と電話をくれたり、反対に被災地からお願いをしたりしたのは、国ではなく、普段から顔を合わせている近隣市町だったそうです。

困っている人の顔が浮かぶからこそ、「助けなくっちゃ」と行動するのです。誰の顔も浮かばないことは、単なるニュースになってしまいます。

市外から通っている職員も増えてきました。「市外に住んでいるから、市内に知り合いはいない」と言うなら、地元で地域活動に参加していますか？ 地元からそうした取組みをスタートしてもらっても良いと思います。今年のお正月は9連休と長いですので、ぜひ、市民の知り合いを一人でも増やすために使ってほしいと思います。

長久手ならではの発酵をめざそう

1月31日（土）に文化の家で映画「降りてゆく生き方」を実行委員会形式で上映します。

この映画は、誰も経験したことがない人口が減っていく社会へのヒントが隠れています。ぜひ、職員のみなさんも見てもらい、何を感じたか私に聞かせてほしいと思います。

映画のモデルとなった酒蔵では、蔵に棲みつく麹菌や乳酸菌が自然に発酵するのを待つ酒造りを行っています。時間がかかるけれど、ゆっくり発酵して、その酒蔵ならではの個性あるお酒ができます。一方、早く大量にお酒を造るためには、それらの菌を買ってきて投入します。早く大量にできますが、どの酒も同じような味になってしまいます。

職員も市民のみなさんと力を合わせ、時間をかけてもいいので、長久手ならではの独自の発酵をし、「長久手だからこそ住みたい、住み続けたい」という個性あるまちにしていきたいと思っています。

1年間、ありがとうございました。年明け、また元気な顔でお会いしましょう。